

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第483号 2022年6月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

井上文学の聖地

宮崎 潤一

滋賀県にはある感慨がある。平成27年12月の全国大会のあと、滋賀県内をスクーター125ccで走り回った記憶だ。御朱印集めである。滋賀県の、「西国三十三所観音霊場」と「近畿三十六不動尊」の御朱印をいただくためである。30番の竹生島にある宝厳寺はすでに訪れていた。朝一番で京都で借りたスクーターに乗り、朝日に

向かいひたすら近江八幡へ。途中草津から国道一号を離れ県道559を北東方面に湖岸に沿って進む。午前の空気はすがすがしい。左手には大きな琵琶湖がずっとつづく。朝の琵琶湖は美しい。橋を渡って31番長命寺へ。ここからの景色は格別だ。そして琵琶湖を背にして南下。県道526→208。安土を通過して32番観音正寺を目指す。この間「西の湖」もあれば畑も一面に広

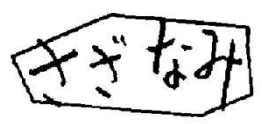
がる。左手に安土城跡の標識を見ながら南下。32番観音正寺。これも山頂にある。表参道から登ろうとしたが、倒木に阻まれてあえなく断念。地図をみると裏ルートがある。早速スクーター登山。大きな観音様を参拝し御朱印をいただくが、ここも眺望がすばらしい。滋賀には山と湖という、いわゆるバエルとところがたくさんある。

その後レインボーロードを渡って琵琶湖大橋。「葛川息障明王堂」へ向かう。葛川坊村町は深い山中。地図を頼りにスクーターで迷いながら走った。ここはここでまた格別である。深山幽谷の趣。「無動寺明王堂」はケーブルカーで比叡山に。浮御堂にも参拝。12番岩間寺と13番石山寺はスクーターで行かなかったのが割愛。そして滋賀大津の圧巻は14番三井寺(園

城寺)。忘れずにお不動様の「圓満院門跡」も参拝。ここからの景色も素晴らしい。日没近かったので京都へ撤収。次は大津で泊まるうと思いつながら西大津バイパスを走った。

最後に私はなぜ御朱印を集めているかに触れる。ご案内と思うが井上靖が琵琶湖をテーマにした作品を書いている「比良のシヤクナゲ」「星と祭」や竹生島(蒼衣の人)「淀どのの日記」「夜の声」など。その中で「星と祭」は嬰兒を亡くした父親の井上靖の心の痛みが根底にあるとされている。「信仰と殯」。湖北の十一面観音像様たちだ。伊豆・沼津・金沢が井上文学の聖地と言われるが、琵琶湖のある滋賀県も私は井上文学の聖地だと思っている。立派なことを書こうと思ったが小学校低学年の遠足作文になってしまった。ただ、滋賀と聞くと、琵琶湖周辺を寺を求めて、湖上の風に吹かれ、畑の匂いを嗅ぎ、鳥の声を聞いて走った琵琶湖南部のスクーターの旅が強烈に再現されてしまうので、心のままを書いた。五感で感じた滋賀だから、「さざなみ国語教室」の先生方の原風景と共有できているような気がする。私の大学の研究室には須田実先生からいただいた観音様がいつも私の背中を見守っていることを付記する。

(国語科授業方法研究会主宰
井上靖研究会事務局長・理事)



▼今村翔吾さんは歴史小説『塞の盾』が直木賞受賞の栄誉に輝いた作家である。作品は、織田信長・豊臣秀吉時代に実在した大津城などを舞台に坂本の石工集団穴太衆が活躍する物語である。「滋賀の作家」を自負する今村さんを、大津市公報『びわこと』は特集記事としてインタビューをしている▼記事の中で自らの小学校時代について「小学5年生の時だった。古本屋で何気なく手に取った池波正太郎の『真田太平記』との出会いが人生を変えた。」と回想したこと語っている。

その後、司馬遼太郎や藤沢周作を読みあさり歴史・時代小説への大海原へ舟を漕いでいったと記事は紹介をしている。その後十数年、筆を執ることなくダンススクールを継ぎ県内を転々としていた時、生徒に、「翔吾くんも、夢諦めてるやん」と言われ愕然とし「夢を諦めるな」と生徒に投げかけ続け続けた言葉を、自分に向けたことが小説家今村翔吾さんの幕明けになったという▼5年生時代の読書が夢実現の動機になったこと。そして、「夢諦めてるんや」に奮起する姿に感動した。それは、読書の力と自らを奮い立たせる言葉の力の大きさを感じたからである。「主體的・対話的で深い学び」の行く先が夢を持ち、その実現に向けて噴火するエネルギーと受け入れられる言葉の力の育成が大事さを強く思った。

(吉永幸司)

「ことばって
こんなに面白いんやね」
少徳 信

6月に入り、「日常を十七首で」の単元の学習が始まった。いわゆる俳句の学習であるが、そのなかで子ども印象深い一言と出会った。

「先生、ことばって、こんなに面白いんやね。」

これは、ちょうど季語について学習を進めているときであった。この時間、タブレットで季語の写真や動画を撮影して、子ども達に課していた。前学年までの学習で季語という言葉は知っていたが、それが何なのか、どういったものであるかについてはちんぷんかんぷんだ。多くの子が苦戦する中、さっと風が吹いた。私はすぐに

「今吹いたような、若葉をざわざわ揺らしていく風を『若葉風』と言います。」

と話した。その瞬間、冒頭のセリフを言った子の目が輝いた。

「風にも名前があるんや！若葉風って言うだけじゃなく普通の風とは違う気がしてきたわ。」

「じゃあ、どんな感じがした？」「何かな、いつもの風とは違って、気持ちよさが何倍にもなる感じがする。この風が若葉風なんや！」このときこの子は辞書的な意味としての「若葉風」ではなく、耳で、肌で、目で「若葉風」という言葉

を獲得したのである。この日、この子は他にも田んぼを吹き抜けてくる「青田風」、若葉がまぶしく広がる「若葉空」など、実にたくさん言葉と出会った。言葉があることで、本当に多くの感覚が押し寄せてくるという体験をしたことだろう。そして、この時間の終わりに私にかけてくれた言葉が冒頭の言葉である。なんとも言いえない、充実した顔をしていた。

同じ言葉を辞書で引けば簡単にかつ時間をかけずに意味を知ることができるとは、しかし、本当に知りたいのは言葉の意味だけだろうか。特に季語において、本当に得るべきはその季語の本意であると考えられる。言葉の意味を説明できるようにすることももちろん言葉の獲得ではある。しかし、感じた美しさや感動、気分が心に湧き上がると、その感覚が言葉によって輪郭が与えられることでより鮮やかで生き生きとしたものになることこそ、本当の意味での言葉の獲得ではないかと痛烈に感じた。

言うまでもなく、国語科とは言葉の教科である。説明文や論説文など、言葉を追いながら論理的に読み進める学習も多くある。だからこそ、今回のような子ども達と言葉の感動的な出会いを大切にしていきたいと思う。生き生きと動き出すような、瑞々しい言葉たちと子ども達をつなぐきっかけになれるよう、日々の実践により力を入れていきたい。

(彦根市河瀬小学校)

一学期の導入期における漢字学習の指導について
高木 富也

前回は、「漢字学習における個別最適な学びと協働的な学び」をテーマに、昨年度4年生の実践報告をさせていただいた。漢字50問テストにおいて「読み優先」と「個別最適な学びと協働的な学び」を展開することで、年間の平均点が90点を越えた、という内容である。今回の報告では、それらの実践を引き続き展開している現状、尚且つ一学期の導入期の指導について述べていきたい。

今年度は3年生36人の担任。素直で学習意欲はあるものの、多動傾向、「傾向」特別支援的な配慮が必要な児童が数名いるという学級である。第一回目の漢字小テストでは、30点以下が5名おり、0点の児童や空白だらけ、促音が抜ける児童もいた。これは指導のし甲斐がある、と感じた。

第一に取り掛かったことは、「意識改革」だ。児童に漢字学習について尋ねると、「黙々とやり続けることが嫌だ。」「やり直しが大変。」「否定的な意見が見られた。」「そこでパワーポイントを用いながら、漢字学習を通して、「粘り強さ・自主性・計画性・丁寧さ」の力が身につくこと、自分、友だち、先生と、声を出したり協力したりしながら、楽しみながら続ける学習である」ということを指導した。4月初めには、漢字探しゲームをするなど、楽しく漢字に触れる機会を設けた。

第二に、「読み優先」の指導である。漢字ドリル音読・速読を継続した。特に、学習している単元の漢字の読み(音訓、文例、熟語)は毎回音読してから書く活動に移

るようにした。今日学習する漢字だけを読む学級と、毎回単元の漢字を全て読み、時には配当漢字二百字全てを読む学級、それらの積み重ねの差は歴然だろう。また、漢字読み50問テストを行うと、「読みならわかるよ！」と意欲的に取り組むことができ、平均点は90点だった。平均点の高さも、児童の自信につながったようである。

第三に、「自主勉強との関連」である。3年生から本格的に始まった自主勉強。4月は意欲面を評価し、楽しく取り組むことに重点を置いた。5月の大型連休明けからは、自主勉強のレベルアップを掲げ、内容のテコ入れを始めた。

イメージは「簡易DSサイクル」を回すである。漢字50問テストの実施日を伝え、それまでに自分がどのような自主勉強ができそうか計画する。実際に自主勉強に取り組んでみる。教師からのアドバイスや友だちとの自主勉強ノート交流で評価をしあい、ギャップに気づく。このあたりで、ノーツに大枠で漢字を数個書くというように学習方法は減少していった。そして、一字を繰り返すのではなく、熟語や文章を書く、漢字ドリルだけでなく教科書の熟語などを探して書くというような改善策が共有されていった。

これらの指導を計画的に行い、迎えた漢字50問テスト。全員が漢字に集中している。空欄を作る児童はいない。テスト中でも、指書き空書きなどで必死に思い出す姿勢があった。結果、平均点は92点。中央値・最頻値共に98点だった。目標達成である。児童にも教師にも嬉しい瞬間だった。今

後も実践を重ねながら、どの児童も力のつく漢字指導の在り方を研究していきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

日記の子どもたち
弓削 裕之

日記を読むのが楽しみだ。Aさんの日記は、おもしろい書き出しで始まっていた。

わたしは、今日なぜかちょうしにのっています。なぜかというところからです。「たくさんおてつだいありがとうございます。」と書いてうれしいです。この日記をかくとき心がはずみました。本当にうれしいです。

日記に書くことで、喜びがふくらんでいるようだ。隣のページには、「今日は、おせんたくほしをてつだいました。」という一文と一緒に、洗濯物を干しているAさんとお母さんの絵が描かれている。お母さんの吹き出しには、「おてつだいありがとう」、Aさんの吹き出しには「だいじょうぶ」と書いてあった。

Bさんの日記は、「先生、あのね。」の書き出しで、いとこと一緒に遊んだ日のこと。

あそびつかれたので、かきごおりを食べることにしました。かきごおりやさんは、れつができていました。やっとしゅん番がきました。けれど、いとこが、いちご、オレンジのどっちかです。てんいんさんがはん分ずつにしてくれました。

そしたら、おとうとも、「はん分ずつがいい。」と、言うので、ブルーハワイとメロンにとくべつにしてくれました。そしたら、私たちのうしろにならんでいた子どもたちも見えていたので、はん分ずつしてもらっていました。

出来事がひとつひとつ丁寧に書かれていて、店員さんの優しい気遣いを知らせたいという気持ちが伝わってくる日記だ。

Cさんの日記は、「気になることシリーズ」。

五月六日 どうやって、やさいはそだったかが、きになりました。五月八日 なぜ、えんびつは、かけるのか気になりました。六月一日(みなつき)なぜ、人間は、かんがえることができるのかきになりました。

いつもこのように綴られているのだが、ある日の日記は、少し書きぶりが違っていた。

六月二日 なぜ、ねこは、毛があるのかきになったのでしらべてみました。こたえは、ねこはきれいずきらしいです。

Cさんに、どうして調べてみようと思ったかを聞いてみると、「すぐ気になったから」と答えてくれた。「すぐ」で動いたCさんの変化がうれしい日記だった。

(京都女子大学附属小学校)

文章たんでいになって
文章を読む
谷口 映介

文章を読む時、合言葉にしていることがある。それは、「文章たんでいになる」ことである。例えば、文学的な文章で、「気持ち」を読む場合、会話文、地の文、情景描写、人物の表情、行動、人物同士の関係等を手がかりとするだろう。「気持ち」を想像するにも文章からの根拠が必要である。子ども達は探偵になってそれらを見つけて出すのである。今回は、説明的文章「自然のかくし絵」(東京書籍三年上)での小さな探偵の様子を紹介する。探偵のテーマは、「問い」の「答え」と、筆者の書き方の工夫である。

「○○のじゅつ」を発見！
教材文には三つの事例(①コノハチヨウ②トノサマバツタ③ゴマダラチヨウのよう虫)がある。それぞれ身のかくし方をまとめるにあたって、一言で「じゅつ」として小見出しをつけた。子ども達は、「木の葉そっくりのじゅつ・かれ葉のじゅつ(①)」「場所選定のじゅつ(②)」「色変えのじゅつ・色変わりのじゅつ(③)」等と名前を付け、その根拠となる叙述を文章から見つけ出していった。術の名前はそれぞれであるが、根拠を交流する中で「答え」に関わる大事な言葉を表に整理することができた。

二、筆者の書き方の工夫を発見！
筆者の書き方の工夫は、①「問い」と「答え」の段落②事例の順番③題名④つなぐ言葉(接続語)⑤比べる書き方が挙げられる。この内、②事例の順番の意図を全体で話し合った。筆者の意図を考えたことは、三年生の子ども達にとって初めてのことであるため、「三つの例があるけれど、みんなならどんな順番に並べますか。」と問いかけた。子ども達からは、「好きなこん虫の順番。」「(体が)大きい順番」など、様々な考えが出された。その上で、筆者の意図について考えた。子ども達は、「筆者の好きな順かな。」「それは、書いていないから分からないよ。」「見つけにくい順じゃないかな。」「羽の裏は保護色だけど、表は保護色じゃないから見つけやすいかも知れない。」と、次第に先述した「じゅつ」に着目して考えることができた。

学習の最後には、初発の感想と比べるために、「文章の内容について」「筆者の書き方の工夫について」の二点で感想を書いた。感想では、「つなぐ言葉とこん虫を書くじゅん番が分かりやすいと思いました。わたしが何かを書く筆者になったら、つなぎ言葉をしつかり使っていきたいです。」と新たな視点を獲得できた姿も見られた。今後も、考えの根拠となる言葉を自ら見つけ出せる学習をめざしたい。(竜王町立竜王小学校)

全校児童が
言葉に親しむために

北川 雅士

今年度から教務という立場になり、様々な学年の学習に補充などで入る機会が多くなった。これまでに低学年の教室で授業をするという経験がほとんど無かったため、1年生や2年生の国語科の学習に関わることができるとはとてもよい刺激になっている。

4月に「ふきのとう」(光村図書 2年上)の授業を1時間分担当することになった。学習はもう後半にさしかかっており、次時に音読発表会を行うので、グループで役割を確認して音読の練習をしてほしいとのことだった。前時までの学習で音読を重ねており、発表のための練習と聞いていたので、気楽に考えていたが、学習の手引きの「おはなしのようすがよくわかるように、音読しましょう。」という一文をきちんと確認したいと思い、授業にのぞんだ。配役の確認をした後、自分がどの文章を読むのかを確認した。全員がもっている教科書の本文に線が引いてあったので、音読グループごとに音読しながら確認した。その後で「お話の様子がわかるように音読するために工夫しているところはありますか」と聞くと、

具体的な答えは返ってこなかった
ので、発表までにもう一度確認し
ようかということになった。

T 「『ふきのとう』のおはなしの
なかに、どう読んだらいいのかの
ヒントがあるかもしれないので探
してみましよう。」「様子がわかる
言葉はありますか。」

なかなか手が挙がらなかったの
で、物語の一部分を2パターンの
読み方で読んでみる。

T 「どうでしたか。」「お話の様子
が伝わるのはどちらでしたか。」

C 「さむかったねって書いてある
から寒そうによんだほうがいい。」

T 「寒そうってどんな読み方にな
りますか。」

C (思い思いの寒そうな読み方で
音読)。

C 「でもささやいてないとあか
ん。」「ささやいています。』って
書いてある。」

T 「ささやくってどういう話し方
になるのかな。」

みんなでささやくについて確
認。

T 「では、どんな音読になったか
読んでみましょう。」

C (「さむかったね。」「うん、さ
むかったね。」を読んで交流する)

T 「ほかにありますか。」「自分
の役割が音読する文章で様子がわ

かるところに赤鉛筆で線を引きま
しょう。」

改めて、文章を読むと、他にも
様子を表す言葉がたくさん見つか
ったため、もう一度練習したいと
いう声や、役割をもう一度話した
いという声もあつたので、担任の
先生と相談してもう一時間音読の
練習をしてから音読発表会を行う
ことにしてもらった。教科書の学
習の手引きでは音読で気をつける
事として「姿勢・口のあけかた
・声の大きさ・読む早さ」があげ
られている。この日の学習が今後
の音読につながっていくといいな
と思った。

2年生以外にも、今年度は単元
の途中や、1時間の単元で指導す
る機会が多い。どの学年、どの学
習内容でも、これまでの自分の経
験を生かしながら指導していくこ
とに加え、これまでのさざなみ国
語教室の実践を読み返しなが
ら、改めて低学年や入門期の言葉の指
導について学びたいと考えてい
る。

また、児童たちが国語に親しむ
機会を増やしていきけるように、学
校の昇降口に毎月の各学年の学習
教材の紹介や、季節の俳句コーナ
ー、校内俳句大会などを実施して
いこうと考え取り組んでいる。立
場は変わったが、全校児童が言葉
に親しめるようにしていきたい。

(彦根市立城南小学校)

編集後記

▼五月例会
は、四月に引

き続きメールで提案と感想・意見
の交流を行いました。提案は好光
幹雄さん(瀬田小)研究テーマ「人
間力」をテーマに実践し学ぶ。
提案実践は「詩人になる」「はな
のみち」(光村二年)「あいうえお
うたによせて」の三事例▼実践の
背景には「言葉の教育はあらゆる
意味で人間教育の核であると考え
る。なぜなら、感性も良心も、言
葉と密接に繋がっているからであ
る。正しい言葉を知ること、美し
い言葉を知ること、繊細な言葉をし
ること、力強い言葉を知ること、
そして優しい言葉、更に感謝の言
葉を知ることが、人間の生き方そ
のものを知るために左右するからで
ある」という考え。▼実践「詩人
になる」は「〇ん〇ん〇ん〇ん」
の〇に平仮名を一文字を入れ、想
像を広げるといいう学習。「とんと
んとんとん」(料理する)「かんか
んかんかん」(鐘が鳴る)という
ようにしながら詩が生まれるとい
う学習の提案。「はなのみち」で
は、「あたたかいかげがふきまし
た」「あたたかいかげがふきはじ
めました」を比べる、話す、考え
る、聞く活動を織り込みながら、
お話の楽しさに導くといいう緻密な
授業記録。さらに、自作の「あ
いうえおうた」や「カタカナのうた」
の提案。入門期における、言葉の
出会いを丁寧に指導することの
大事さにつながりました。共有
することができました。
▼巻頭には、宮崎潤一先生の玉稿
を頂きました。感謝。
(吉永幸司)